

ベルリン市立歌劇場に於けるワルター

ブルーノ・ワルターが、一九二五年から一九二九年まで、ベルリン市立歌劇場の音楽総監督の地位に就いていた事は、彼の自伝「主題と変奏曲」が出版されたお蔭で、我が国でも広く知られる様になりましたが、その間の活動に就いては、詳細には判明していませんでした。ところが、その期間に同劇場でワルターが上演した演し物と上演日に関する資料を入手する事が出来ましたので、早速会員諸兄にその内容をお知らせします。尚、此の資料は、山口中彦会員の提供によるものです。

- 一九二五・ 九・一八 ワーグナー「マイスタージンガー」
- 同 一〇・一〇 ドニゼッティ「ドン・パスクワレ」
- 同 一〇・二六 R・シュトラウス
- 同 一一・一〇 グルック「アウリスのイフィゲニア」
- 一九二六・ 一・二七 モーツァルト「後宮よりの逃走」
- 同 二・二七 チャイコフスキー「スベードの女王」
- 同 九・一四 ベートーヴェン「フィデリオ」

「ナキソス島のアリアドネ」

ブルーノ・ワルターの消息

ピーター・ヒュート・リード

芸術や芸術家にとっては、元来国境などは無い筈である。けれども、不幸な事には、必ずしも常にそうであるとは言えない。ブルーノ・ワルターが、ベルリンとウィーンの両都市で、音楽の為に成就したあの素晴らしい業績にもかかわらず、ナチスがオーストリアを併合した時（註・一九三八年三月十三日。その日、彼はオランダに旅中であつた）、ワルターは、その国から逃避しなければならなくなつたのである。だが、ドイツを除いて、世界中の楽界は、それでもなおワルターを讃美している。又、多くの作曲家、特にモーツァルトとハイドン、の音楽の為に、今まで此の指揮者が捧げた顕著な貢献は、今迄以上にその真価を認められる様になつてゐる。

今年の夏（註・一九三九年）、ワルターは、彼の指導によつて成功を博して来たモーツァルトの生誕の地ザルツブルクのそれではなく、スイスのルツェルンで催された国際モーツァルト音楽祭の計画に、友人トスカニーニと共に参加したのである。

八月二十一日、モーツァルト音楽祭に於ける演奏指揮の契約を、ワルターがキャンセルした事実の裏には、未永く我々の胸を痛め続けるに違ひない悲劇が秘められていた。それは、その三日以前、ワルターの次女（註・グレーテル）が、亡命の映画監督であり、また建築技師である、夫の手によつて生命の絆を断たれた事である。最後の瞬間にかけつけたアルトゥーロ・トスカニーニは、茫然自失状態の父に代つて、指揮台に立つたのである（註・その時

- 一九二六・一〇・一二 ウェーバー「オイリアンテ」
- 同 一一・ 六 ブッティーニ「トウランドット」
- 一九二七・ 三・ 九 ヴェルディ「ファルスタッフ」
- 同 三・三一 プフィッツナー「哀れなハイナリッヒ」
- 同 一〇・二二 グルック「オルフォイス」
- 同 一一・ 九 ドビュッシー「ペレアスとメリザンド」
- 一九二八・ 二・一二 ヴォルフ「コレギドール」
- 同 三・二一 モーツァルト「フィガロの結婚」
- 同 一〇・二七 ワーグナー「タンホイザー」
- 同 一二・一二 ヴェルディ「オテロ」
- 一九二九・ 二・ 九 チャイコフスキー
- 同 三・二三 ベルグレージ「奥様女中」
- 同 シェンク「村の理髪師」

「エフゲニ・オニエギン」

同音楽祭で既に一度演奏された、ベートーヴェンの第五交響曲とグライオリン協奏曲（独奏アドルフ・ブッシュが再演された）。宰相クルト・シュシュニツクの熱烈な支持者であつたワルターは、独壇合併の後、フランスに亡命したが、フランス政府は彼に名誉市民権を与えた。

フランスに居住する様になつてから、ワルターは、パリとロンドンの録音スタジオで、忙しく働く様に成つた。EMIの係員の一人は、「ワルター氏は、レコード音楽の価値について、極めて明確な意見を持っている」と述べている。また、ワルター自身も「録音とは素晴らしい恩恵である。録音技師たる者は、常に実際の音響にそれを接近させねばならない事、および、楽聖の諸作品の録音が、決しておろそかに行われぬ様に注意を払う事とに、重大な責任を負っているのである」と語つたのである。

ワルターに、此の上無い喜びを与えた録音の一つとして、彼自身がピアノ独奏部を受持つたモーツァルトの「ピアノ協奏曲ニ短調K466」がある。それと、ウィーンに於ける彼の最後の録音の一つ、マラーの第九交響曲とは、恐らく、ワルターとウィーン・フィルとの、「絶対のコンビ」を反映する最大の財宝として、後世に遺されるだろう。ワルターとウィーン・フィルとの此の様な関係が、断ち切られる事は、必然的に、その何れかの生命の一部を犠牲にするのではないかと言う感じを抱かせるのである。

ワルターは、ウィーン・フィルのメンバを単なる職業的楽員と見なす事なく、寧ろ同僚として接したと伝えられている。また、楽員達も、常に全ゆる支持を彼に捧げて、彼の好遇に報いたとも言われる。ワルターは、独壇合併の直前に、ウィーン国立歌劇場との七年間に亘る契約に署名した。若し、契約通りに事が運んで

いたならば、彼がどの様な仕事をする様になつたらどうかと考へてみても、今日では最早推測としてしか許されない。若し、彼にとつて、ウイーンの日が何を意味していたかを理解すれば、ワルターを失う事が、どういふ事であつたか、漠然とながら判るのではないだろうか。

ワルターが今日迄に完成した全ての録音にたずさわつた、EMIのF・W・ガイスベルク氏は、最近「ザ・グラモフォン」誌を通じて、ワルターに関する種々の情報を我々に提供して呉れた。ガイスベルク氏はこう語る。「ワルターは、疲れを知らない勤勉家です。ウイーンに於ける彼の一日というものは、まず午前中はオーケストラのゲネ・プロ、午後はレコードの録音、午後六時には合唱の指導又はゲネ・プロ、その上夜は歌劇場に於ける上演指揮という多忙さです。ひどい時には、歌劇の終演後、その時以外の録音を行なつた事さえあります。寸刻の余暇も無く働いている時こそ、彼は無条件に幸福であるかの様に、私には思えます。録音スタジオに於けるワルターは、録音という仕事に対する豊かな経験と、悠揚迫らざる態度で、我々に強い印象を与えます。古臭いまたありふれた作品の場合であつても、何時もあたかも初めて手がける新しい作品に立向う様な態度で臨む事にしていて、彼自身述べた事があります。……」

ワルターが、ロンドン交響楽団やパリ音楽院管弦楽団を指揮した、新しいレコードの評判から判断すると、将来彼のウイーン時代の録音を凌駕するのではないかと思われ。先ず第一に、ロンドンやパリのオーケストラが録音に使つた部屋は、ウイーン・フィルが使用したそれよりも、遙かに優れている。生き生きとした

十分に知つて居ります。また、貴方が御自身の悲しみに対する慰めを其処に見出されるであろう事をも承知して居ます。この事を知ればこそ、他の多くの人々と共に、我々は、音楽芸術に対する貴方の精進を切に望んでやみません」と。

ブルーノ・ワルターの様な人物は、そうざらに生れるものではない。我々、音楽芸術の最高であるものの価値を知る者は、彼の様な偉大な人間の事業を、徹底的に吟味しなければならぬ義務を持つて居るのである。それによつてもたらされる我々に対する報酬の大きさは、計り知る事が出来ないであろう。

(一九三九年秋)

「例会の記録」

第五回例会は、九月二十五日(土)に、東京銀座四丁目、山野楽器店五階ホールで開催されました。

一、ベルリオーズ「幻想」交響曲 作品一四a

① パリ音楽院管弦楽団(一九三九)

② ニューヨーク・フィルハーモニー(一九五〇)

ワルターとしては珍しいフランス物ですが、此の曲の真価を、最初に認めたのはドイツ人だつたと言われているので、あながち場違いとも言えないでしょう。そればかりか、ワルターは度々、パリを訪れましたが、その地で此の曲を屢々演奏して、好評を得ていたのですから、此の録音が遺されていたのは幸運な事でした。パリのオーケストラによるものは、円満なドイツのオーケストラ

録音に仕上げる為には不可欠である音のひろがりか、この新しい録音では、実に明瞭に聞える。けれども、ウイーン録音に於いて常に聞えて来るあの反響音は聞かれない。それにまた、ワルター自身も、そのウイーン時代よりも、一段と芸術的進境を見せて来た様である。時として彼が楽曲解釈中に盛込んだ、余りにも自由なロマンティックな情緒は、今ではより崇高、且つ、より真摯な熱情に道を譲つて居る。迫力の籠つた情緒が、これ迄の感受性を排除したのである。この事実は、最近彼がNBC交響楽団を指揮した時に、全ての批評家の注意をひいた事柄である。

ワルターが、ベルリンでも、ウイーンに於けると同様に、指導的の一大勢力として尊崇の念を集めた一時期があつた事を考えるとガイスベルク氏が「彼は嵐の中心となる様な運命を背負つて居る」と云つた事も、確かに當つて居る様に我々には思われる。また、此の五年間は、彼にとつて劇的なエピソードの長い連続であつた事も事実である。どんな力強い偉大な芸術家でも降伏してしまつたに違いない様な諸事件なのであつた。けれども、ワルターの暗いけれども優しい両眼に宿る厭世的な眼差しを除けば、彼の生活が遭遇した動乱の数々を人に感じさせるものは何も持つていない。先日、ニューヨーク・ジュリアード音楽院で催された、学生による歌劇上演を見守るワルターは、興味と関心に満ちた観客の一人であり、元気に満ち満ちて居た。

我々は、同じ様な悲劇を知る者として、ワルターの最近の不幸に対して、深い同情を禁じ得ない。けれども、ワルターを親しく知る者としては、我々は彼に対して単に空々しい慰めの言葉を贈る代りに、次の様なはげましの言葉を捧げたい。

「我々は、貴方が自分自身の生活を音楽に捧げ尽された事を、

との協演とは異なり、ワルターらしい大らかさ、豊麗さ、テンポの柔軟性、ワルター独特の節廻しには欠けないでもありませんが、珍しいコンビによる新しい興味も生れて来ます。

ニューヨーク・フィルとの協演は放送録音ですが、ワルターが此のオーケストラを自家楽団中のものに始めた頃の録音で、オーケストラはワルターの棒に一分の隙も無く従つて、ピツタリとした呼吸がうかがわれる興味深いものです。ワルターの特長が、より判然と現れている演奏で、ベルリオーズ・ワルターの「幻想」と言うよりも、ワルター・ベルリオーズの「幻想」と言いたい程の演奏です。ただ残念な事は、放送時間の調整の為か、第四楽章「断頭台への行進」が割愛されています。

二、ワーグナー「タンホイザー」「バッカナレ」(一九二六)

「神々の黄昏」ライオンへの旅(一九二七)

ロイアル・フィルハーモニー

「神々の黄昏」ジューグフリートのライオンへの旅

プリティッシュェ交響楽団(一九三二)

一九二四年から一九三二年迄のイギリス録音には、ワーグナーの作品が非常に多い事が目につきます。昨年八月に、その一部の複製盤が、テイチクから発売されました(会報第一号参照)。

その中から、我が国で今迄に発表された事が殆ど無かつた二曲を選んで聴いて戴くと共に、其の中一曲の五年後の演奏を、比較の為に選びました。一九二六、七年と云えば、電気吹込の極く初期なのですが、思ひの外良い音で録音されている事は素晴らしい事でした。何れもワルターの若々しさと、生真面目さと、リリシズムが満溢れ、「バッカナレ」では蠱惑的な魅力さえ感じられ

ます。

三、プフィッツナー「バレストリナー」第一幕への前奏曲

これは、ワルターの演奏ではないのですが、ワルターと最も親密な関係にあったプフィッツナーの自作自演で、ワルターとの精神の親近性を如実に表したものです。また、此の曲の初演は、一九一七年六月一二日に、ミュンヘン摂政官歌劇場に於いて、ワルターの指揮棒によつて行なわれました。

第六回例会は、十一月二十七日(土)に、前回と同じホールで開催されました。此の度は、一九二六、一九三八、一九四三年の録音を聴いて戴きました。つまり、ワルターが五十才の頃、六十一、二才の頃、及び六十六才の時の演奏です。

(一) ワグナー「リエンツィ」序曲

「ローエン格林」第三幕への前奏曲

ロイアル・フィルハーモニー

テイチクのワルター・ワグナー名演集に含まれなかつたワルターとロイアル・フィルとの協演による録音です。

「リエンツィ」は、日本で最初に発売されたワルターのレコード(日C J七〇三九一四〇)として知られていますが、その実物を見た事のある人も、聴いた人も少いので、「幻」のレコード視されていましたが、最近英国コロムビア盤を入手しましたので早速例会の席上で御紹介したわけです。非常に生真面目で、将来の大事としての「ひらめき」が随所に聴かれる、上品にして情熱的な名演です。

「ローエン格林」第三幕への前奏曲は、SPでは「タンホイ

ザー「パッカナーレ」の第四面にフィル・アップとして発売されたものですが、テイチクのワルター盤では割愛されたものなので、此の例会で取り上げました。是また若き日のワルターの天才を示す名演です。我が国では、最近迄存在が知られていなかった名品です。

(二) ヘンデル コンチェルト・グロッソ 作品六の一二

パリ音楽院管弦楽団(一九三八)

コレルリ クリスマス・コンチェルト ト短調

ロンドン交響楽団(一九三八)

ワルターのレパトリリーには、バロック音楽が非常に少く、彼の豊富な盤歴にも、此の二曲以外皆無です。辛うじて、パッハの「マタイ受難曲」の録音が残っていますが、市販レコードではありません。此の二曲が、一九三八年に集中して録音された事は、非常に興味を持てる事実です。幸いな事に、どちらも優れた名演です。所謂「古典的」な演奏でもなければ、現代的なシャープなバロック演奏でもない、十分にロマンティックな、つまりテンポもゆつたりした、ハーモニーも豊艶な、旋律も大らかに唱った、リズムも深い、いかにもワルターらしい解釈で、聴く者の心をすつぽりと包んで了う名演です。

米國ワルター協会が発行した、パッハの「マタイ受難曲」(一九四三・四・一八)のリカッティング盤では、第四面に此の二曲がフィル・アップとして入っています。

(三) ベートーヴェン「エグモント」序曲

ハイドン 交響曲第八十八番 ト長調

ニューヨーク・フィル(一九四三・七・一一)

一九四三年と云えば、第二次世界大戦が愈々烈しくなつた年で此の放送録音にも、戦意昂揚の為に、先ずアメリカ合衆国の国歌が演奏されるのが、当時の戦時特色を物語っています。アナウンスメントの頭が切れているので、ワルターの演奏かどうかは不明ですが、細い処にワルターらしさがほの見えているので、ワルターの演奏だと考えられます。

一九四三年は、ワルターがニューヨーク・フィルを指揮し始めてから、まだ三年目の頃なので、後年の様な寸分の隙も無いコンビには成っていない、ワルターとしても精神的に不安定な時期で、此のオケを完全に自分の物としきつていない憾みがあります。「エグモント」にも、ハイドンの最終楽章にしても、「疾風怒濤」的な所があり、つんのめる様なリズムに不安を感じさせるのも、此の頃のワルターを知る為には貴重な資料です。

(四) ベートーヴェン 英雄交響曲 第一楽章

シンフォニー・オヴ・ヂ・エア(一九五七・二・三)

時間が余りましたので、おまけとして聴いて戴いたのが、トスカニーニの死後、約一週間経って催された「トスカニーニ追憶コンサート」に於けるワルターの「エロイカ」の第一楽章です。是は、また近い将来に例会の席上で、全曲を聴いて戴く予定です。

(五) モーツァルト P協奏曲 ニ短調 K・四六六

マイラー・ヘス(P) ニューヨーク・フィル(一九五六・三・四)

是は、第二回例会の席上で、披露されたもののリヴァイヴアルで(会報第一号参照)、開場後、例会開始迄の時間に聴いて戴きました。

「第二回研究用録音資料刊行」

当協会では、昨年十二月、左記LP二枚を会員諸兄に配布し始めました。

A 電気録音(BWS一〇〇三)

モーツァルト 交響曲第四十番ト短調(一九二九)

J・シュトラウス 円舞曲「ウイーン気質」()

喜歌劇「蝙蝠」序曲()

B アクリスティック録音(BWS一〇〇四)

チャイコフスキー交響曲第六番ロ短調「悲愴」(一九二四)

モーツァルト 歌劇「コジ・ファン・トゥット」序曲

歌劇「イドメネオ」序曲(一九二五)

オーケストラは何れもベルリン国立歌劇場管弦楽団(別名ベルリン国立管弦楽団)です。

此の中、BWS一〇〇三に入つた三曲は、昭和五、及び六年に我が国でも発表されましたが、現在では入手困難となつて居るものです。尚、採音に当つて最も苦心したのは、モーツァルトの第四十番交響曲の録音レベルを調整する事でした。実は、他の殆ど全てのレコードのそれと比較すると、半分しか無いのです。それだからこそ、発売直後から、録音が悪いとか、音が貧しいと、或いは残念がられ、或いは非難を受け続けて来たわけです。既にお聴きになつた会員諸氏には御理解戴けると思ひますが、此の点で私達は、成功したと言っても、あながち手前味噌ではないと思つて居ります。その結果として、音量は豊かになり、内声部もは

つきりと聞き取る事が出来、また各楽器の音色もクリアーに識別出来る様になり、ワルターの芸術の鑑賞や、彼の楽曲解釈の研究に、充分堪えられるものとなりました。此処でも外国プレスはその偉力を発揮してくれました。また、J・シントラウスの二曲では、随所にワルターの掛声が聴かれるのは、何の部分に彼が力を入れていたのか、判る様な気がして、興味深く感じられます。BWS100四の三曲は、我が国では初めて紹介されるもので、我が国のみならず、全世界に於いても、存在がほとんど知られていない、四十八、九才の若き日のワルターの演奏で、ドイツポリドール盤から採音。アコースティック録音ながら、比較的音の良いもので、グミニトリッピカイトに満ちた、ロマンティックにして、而も造型の確固たる、後年の彼の演奏に見られる、彼の演奏様式が既に確立されている事を証明する貴重な録音です。

「ブルーノ・ワルター」人と芸術

(この一文は、昨年十一月二十日、日本女子大学香雪館四〇五教室において行なわれた早稲田大学音楽同攻会と日本女子大学古典音楽鑑賞会の合同研究会で発表された、協会々員 氏のレポートの要です。)

まず、ぼくとワルターとの出会い、というあたりから話を始めたいと思います。

中三になる時に、ぼくはステレオを買ってもらって、本格的にレコードを聴き始めたのですけど、その時最初に買ったレコ

ードは、パインステイン指揮の「新世界より」でありました。その次は、約二週間ぐらい経った後、「田園」が欲しくなつて、レコード店へ行つたのですけど、実はぼくはカラヤンが欲しかった。けれども、どこのレコード屋にもカラヤン・ベルリン・フィルの「田園」はなかったのではありませんが、最後に行つたレコード屋で、店員から「田園ならワルターの方がいいですよ。」と言われて買つてきたのが、OS一九四というナンバーの、コロムビアから出ていたワルター指揮の「田園」でありました。ワルターの写真が大きくジャケットの全面を飾っていました。

針をおろして、第一楽章の第一主題が暖かいふくらみをもって優美に流れ出して来て、リタルダンドを伴つてフェルマータに終止する時、ぼくは、すでに自分にとつて遠い昔のこととなつていたひとつの世界の中に呼び戻されていたのです。ぼくは田舎の生まれで、幼い日々を畑や田んぼや林や昆虫に囲まれて、又それらを最良の友達にして育つたのですが、右側は黄色い菜の花畑がずつと続いていて、左側には茶色い土の上に白い大根の花がかわいらしく咲いている、そして向こうには松林が見える、そんな畑の中の道を、明るく暖かい春の陽射しをいっぱい浴びながら、泥で汚れたズボンをはいて、網を片手に元氣一杯モンシロチョウを追いかけている幼い日のぼくの姿と、そんな時に小さな胸に生じた、言葉にはならないが明らかに自然への感謝と愛着と憧れに満ち溢れていたぼくの気持を、このワルターの演奏は一瞬にして蘇らせてくれたのであります。

その後、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、ブラームス、マーラー等をずつと聴いてきたわけなのですが、夢と希望によつて心が満たされていた高校時代、り、超一流の作家のそれとは言えないとしても、少くとも一級の文筆家の筆には十分匹敵すると言える文章です。又、その文体は美しく流れていて、それが、ワルターの演奏するモーツァルトのイメージと重なりあつて響いてくると感じるのは、恐らくぼくばかりではないでしょう。

それでは少し読んでみましょう。友情について、ワルターは次のように言っています。これは一九〇一年にワルターが二十四、五才の時、妻を伴つて初めてウィーンにやつてきて仕事をしたころのことを回想した文章です。

「友情が何でありうるかというのを、私と妻とはこれらの人々から経験した。彼らはその友人たちの人生を、まるで自分の人生であるかのように、ともに生きた。彼らはたしかに素質において博愛的であつたし、なにかの危難が視野に入りさえすれば、飛んでいって忠告と行爲とを惜しまなかつたけれども、さらにそれ以上のこと、すなわち友情を他のすべての人間的な関与からきわだたせるゆえんのもの、示していた。それは、ともに喜び、ともに生きることである。」

彼の芸術を解くカギとして、この上なく貴重な言葉だと言えます。いや、彼の芸術創造の秘密をすべて物語つていると言つても言い過ぎにはなりません。人の人生をまるで自分の人生であるかのように生きる、あるいは、ともに喜び、ともに生きる、などという言葉は、彼の言葉そのものであります。作曲家の書いた楽譜の中に、暖かいまなざしとしっかりと足どりをもつて歩いて、作曲家の人間と人生をともに感じる、それがワルターが、音楽を演奏する時の基本的な態度であります。ですから、我々が彼の演奏を聴く場合にも、彼のところまで歩いていって、謙虚に

あるいは理想が現実によつて打砕かれて苦しい思いをすることの多かつた大学時代のどちらにある時でも、ワルターと一緒にいる時間というのは幸せな瞬間でありました。ワルターの心づくしの演奏を聴く時に、それは特に青春期のやわらかな心が傷つけられて沈んでいる時に感じたのであります。ワルターはどれほどの広さと強さと優しさをもつてぼくを包んでくれたことかと今更ながら思い出します。そして又、音楽を聴き始めてから現在までの自分を振り返つてみて、青春時代という一番絵り豊かな時期に、ワルターという偉大な人生の師に出会い、私淑ながら、導かれたことが、自分の人間成長の上でどれほど大きい影響を持ったかというのを、今ひしひしと感じるわけでありました。こうして、自分の学生生活も終わりに近づいた今の時期に、ぼくが音同でやる最後のレポートと思われるきょう、まあ音同でもこの一年間にモーツァルトについてだとか、冬の旅についてだとかいろいろやってきましたわけですが、きょうこの場でブルーノ・ワルターについて話す機会が与えられたことは、ぼくにとつてこの上なくうれしいことなのであります。

ところで話ばかりですが、ブルーノ・ワルターの自伝的回想録で、「主題と変奏」という題の本(白水社)があります。ワルターの芸術観とか音楽性、あるいはそれらを裏打ちしている人間性を知りたい人は彼の演奏を聴けば良く、又それが最も正統な手段なのであります。もう一步突っこんで、彼のナマの人間性や人生観、あるいは彼のリアルな人生そのものを知りたいと思う人にとつて、この本はまさに宝物のような存在であります。ワルターは非常な教養人であり、幼い時から文学書などになり耽溺したようですが、そのせいか、彼の文章は文学的センスに溢れてお

彼が音楽を通して語る心の言葉に耳を傾ける、という態度をとらなければワルターの芸術は理解出来ません。ワルターの演奏を「浅い」とか「生ぬるい」とか言って批判する人は、音楽を聴く姿勢において、必ず演奏の局外に立っています。そういう人には、ワルターの演奏は何も語ってくれません。しかし、人の心の内部にまで入って行って、共に感じようとする人間的性向を持つ人には、ワルターの芸術は、その偉大なヒューマニズムを伝えてくれるのである、と言えます。

ところで、ワルターは、生涯においてウイーンという都市を、こよなく愛していました。ワルターは、一八七六年ベルリン生まれであるのに、一九一一年にはオーストリーに帰化しています。それほどワルターが愛したウイーンとの出会いを、ワルター自身の言葉によって語ってもらいます。

「ウイーンに住む人が、ショットン門のあたりで旧市街をあとにして、細く美しいヴォテーフ教会のそばを過ぎてヴェーリング通りに入ると、彼の視線は、あなたの地平線をよぎるカーレンベルクの優雅なシルエットにつきあたる。世界都市の騒がしい通りのかたに、あの山並のおちついた美しさが見えると言ふことは、私にとってなんと新しい、決して古びることのない魅力であり、どれほど日日の生活を暖めてくれるものであろう。勤めにかよう道すがらにも、ウイーンの森へこのうた無言の、友情に溢れる誘いをしばしば眼前にするとは、どれほど心の慰めであつたらう。山々に活動を見守られているこの独特な大都会を出て、カーレンベルクのふもとの魅惑的な郊外まで乗物で行き、ハイリゲンシュタットから八田園の小川Vにそつてヌズドルフの方へ散歩するたびに……こうしてベートーヴェンの足跡をたどる音楽家が何を感

じていたか、友よ、君達に解ってもらえるだろうか」

このように、ワルターがウイーンを愛していたというのにも、彼が生まれながらに持っていた人間的性向が、ウイーンを持つ雰囲気と一番マッチしたからであり、言葉をかえて言うならば、彼が心の最も奥深いところに秘めていた、郷愁とか憧れとかいう感情を、ウイーンが一番こころよく迎えてくれたからだと言ふことになるでしょう。ワルターの最も得意とするレパートリーをながめてみると、ハイドンから始まって、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、ブラームス、マーラー、ブルックナーとなりますが、これらの作曲家はひとりの例外もなく、皆ウイーンでその芸術創作の花を咲かせた人達ばかりなのであります。ワルターがこれらの作曲家達を最も得意としていたことは、今述べた、ワルターがウイーンに対して抱いていた親密な感情を抜きにしては考えられないのであります。ですから、これ又これらの作曲家達の演奏には、絶大な自信と伝統を持つ地元のウイーン・フィルハーモニーを指揮して、ワルターがこれらの作曲家達の作品を演奏した場合には、作曲家―指揮者―演奏者がウイーンという共通の風土において、時代を超えたところにあつても精神的に結びつきあつていて、それぞれの理想的な演奏と讃えられているわけでありませう。

「デイスコグラフィ―訂正と補遺」

既に会員諸氏のお手もとにお届けしました、ワルターの録音順デイスコグラフィ及び「ステレオ芸術」誌、一九七一年十月号

に発表しましたワルターの作曲家別デイスコグラフィに、左の通り訂正と追補を加えますので、然る可くお書き込み願います。

- 八 録音順デイスコグラフィ V
- 四頁 ワグナー「リエンツィ」序曲に、日C J七〇三九一四〇を追加。
- 七頁 マーラー 我は此の世に忘れられて 英不明を英 LB四五に訂正。

- 九頁 モーツァルト「ジュビター」一九三七を一九三八・一に訂正。
- 一四頁 ドヴォルザーク 第四交響曲 英O LX八七七〇をLX八七七七に訂正。

同 ペートーヴェン 英雄交響曲 マトリックス番号不明をXOO 四一〇九五一一〇六に訂正。(此の資料を提供して下さったのは木部茂会員で、此の結果、三重協奏曲の方が録音順では先という事が判明しました。)

- ハ 作曲家別デイスコグラフィ V
- ベートーヴェン「田園」①一九三七を一九三六・一二に訂正。
- 〃 V協奏曲 ②一九四六を一九四七に訂正。
- 〃 P協奏曲「皇帝」②一九四一・三を同年十二月に訂正。
- ブラームス「ハンガリー舞曲」COLをNYに訂正。
- モーツァルト「交響曲第四十番第四楽章のみ」ベルリン・フィル

- (日C OL五〇〇一)(一九五〇年頃)を追加。
- 「コジ・ファン・トゥッテ」② COLをNYに訂正。
- シューベルト「未完成交響曲」③ COLをNYに訂正。
- ワグナー「リエンツィ」に、日C J七〇三九一四〇を追加。
- 〃 「バルジファル」転景の音楽 ②一九二五年十一月を、

一九二七年に訂正。

ウェーバー「魔弾の射手」①英Cを米Cに訂正。

珠 玲 仁 雅

○日楽名古屋支店では、昨年十月二十日、「ワルターのレコード及びフィルム・コンサート」を開催。講師は村田武雄氏。

- (イ) ワルターの生涯について
 - (ロ) ワルターの芸術について(ドイツ・レクイエムを中心に)
 - (ハ) 映画「ワルターの指揮するレオノーレ第二番、A・ミケリス、L・パンスタイン、ワルターを語る」
- 同地方在住の協会々員数氏が、この催しに参加なさいました。

○昨年十一月三日、「早稲田祭」で、また同年十一月二十日、日本女子大学香雪館四〇五教室において行なわれた、早稲田大学音楽同攻会と日本女子大学古典音楽鑑賞会の合同研究会で、協会々員 〃氏が「ブルーノ・ワルター、人と芸術」と題するレポートを発表なさいました。

○協会及び協会活動紹介の記録(I)

- (一九七〇年)
- 「ステレオ」七月号 海外レコード・ニュース(小林利之氏)
- (一九七一年)
- 「音楽展望」四月一日号 (宇野功芳氏)
- 「レコード芸術」八月号「ワルター―ウイーン・フィルによるハ

米国コロムビア発売SPレコードのアルバム番号・レコード番号対照表

| 作曲者 | 曲目 (協演者) | アルバム番号 | レコード番号 |
|----------|---------------|--------|------------------------------------|
| ベートーヴェン | 英雄 (1941) | MM 449 | 11530D - 11535D |
| シューマン | ライオン | MM 464 | 11581D - 11584D |
| スメタナ | モルダウ | MX 211 | 11666D - 11667D |
| シューマン | 女の愛と生涯 | MM 539 | 17362D - 17365D |
| シューマン | 詩人の恋 | MM 486 | 17295D - 17296D 71308D - 71309D |
| ブラームス | 運命の歌 | MX 223 | 11801D - 11802D |
| ベートーヴェン | 皇帝協奏曲 | MM 500 | 11723D - 11727D |
| ベートーヴェン | 第五交響曲 | MM 498 | 11749D - 11752D |
| ベートーヴェン | 第八交響曲 | MM 525 | 11896D - 11893D |
| モーツァルト | アリア (リリー・ボン) | MM 518 | 17345D - 17347D 71696D |
| バーバー | 第一交響曲 | MX 252 | 12128D - 12129D |
| モーツァルト | ジュピター | MM 565 | 12074D - 12077D |
| マーラー | 第四交響曲 | MM 589 | 12213D - 12218D |
| メンデルスゾーン | V協 (ミルシグティン) | MM 577 | 12142D - 12145D |
| ベートーヴェン | 田園 (フィラデルフィア) | MM 631 | 12399D - 12403D |
| モーツァルト | アリア (ピンツァ) | MM 643 | 71846D - 71849D |
| シューベルト | ハ長調交響曲 | MM 679 | 12550D - 12555D |
| マーラー | 第五交響曲 | MM 718 | 12666D - 12673D |
| ベートーヴェン | V協 (シゲティ) | MM 697 | 12631D - 12635D |
| ドヴォルザーク | 第四(八)交響曲 | MM 770 | 12887D - 12890D |
| ベートーヴェン | 第一交響曲 | MM 796 | 12924D - 12927D |
| マーラー | 歌曲集 (ハルパン) | MM 809 | 17563D - 17565D |
| ベートーヴェン | 三重協奏曲 | MM 842 | 12896D - 12899D |
| ベートーヴェン | 英雄 (1949) | MM 858 | 13031D - 13036D |
| ベートーヴェン | 第九交響曲 | MM 900 | 13000D - 13007D |

(資料提供者: [] 両氏)

イドンの「軍隊」(宇野功芳氏)

「ステレオ芸術」九月号 # サークル通信 (菅 一)

「ステレオ芸術」十月号 # 作曲家別ディスクグラフィック (菅 一)

「ステレオ芸術」十一月号 # レコード談話 (岡 俊雄氏)

F M 東京、十一月二十五日、午前八時四十八分 # 協会第六回例会のお知らせ

「ステレオ」十二月号 海外レコード・ニュース (小林利之氏)

「ステレオ芸術」十二月号 # 作曲家別ディスクグラフィック・訂正

と補遺 (菅 一)

「レコード芸術」一月号 # 協会設立のすずめ (菅 一)

○ワルターが、ウイーン・フィルを指揮した、ブラームスの第三交響曲 (CHAX 九五〇二)、シューベルトの「未完成」(同一〇三二八)、ベートーヴェンの「レオノーレ」序曲第三番(同一〇九一一)のレコードの録音年月に就いては、一九三六年という事だけ判明していて、月までは判っていませんでした。ところが、[] 氏の御研究により、大体の見当がついて来ましたので、中間報告として会員諸氏にお知らせします。

ワインガルトナーのベートーヴェンの第八交響曲 (CHAX 八九一九四) が、同年二月二十五、六両日に録音された事と、同じく「英雄」交響曲 (同一二二二三) とアーノルド・ロゼーの「アテネの廃墟」序曲 (同一二四) が、同年五月に録音された事が判明したのです。従って、前記三曲の録音は、同年二月末から五月(多分中旬)までの間の、或る日に行なわれたと言えます。会員諸氏の中で、是以上に詳細な資料をお持ちの方がおいでに

りましたら、何卒御一報下さい。

○今年初頭(一月七日)、東芝エンジェル・レコード、GR シリーズの一枚として、ワルターの、一九三六年五月二十四日に録音された、ケルスティン・トルボレイ、チャールズ・クルマン及びウイーン・フィルとの協演による、マーラーの「大地の歌」及び、トルボレイの独唱による、「我は此の世に忘れられて」(GR 二二二四) が発売されました。今迄、海賊盤が一種と、ベレニアル盤が出廻っていましたが、やつと出るべき所から出たという感じですが。会員諸氏は既に御承知の通り、ワルターの三種類市販されている同曲録音の最初のもので、その復活が待たれていたものです。

○当協会第七回例会は、三月五日(日)午後一時三十分より四時三十分迄、東京銀座四丁目・山野楽器五階ホールにて開催致します。多数の会員諸氏の御出席をお待ちして居ります。